

## 東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会

### 第5回議事録

令和1年7月11日（木）10時00分～

TKP 上野駅前ビジネスセンター

カンファレンスルーム 3A

**【堤座長】** それでは時間になりましたので、始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中ご出席を賜り、まことにありがとうございます。定刻になりましたので、第5回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を開催いたしたいと思えます。

まずは、事務局から定足数及び会議の公開に関する確認をお願いいたします。

**【小野事務局長】** 本年4月に赤羽の後任として事務局長に着任いたしました小野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。着座にて失礼いたします。

まず、定足数の確認でございます。東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会設置要綱第4条第2項におきまして、懇談会の会議は委員の過半数の出席を要しております。本懇談会の委員の数は10名、本日、現在6名のご出席をいただいております。懇談会は成立していることを、まずご報告させていただきます。

なお、池田委員、片山委員、住吉委員、湯浅委員におかれましては、所用により本日ご欠席とのご連絡を頂戴しております。

また、本懇談会でございますけれども、設置要綱第6条によりまして、公開で行うものとされておりまして、資料、また議事概要につきましても原則公開となっております。懇談会の決定により、非公開とすることもできるということでございますが、本日は公開ということよろしいでしょうか。

(異議なし)

**【小野事務局長】** ありがとうございます。それでは、本日の会議につきましては公開とさせていただきます。

傍聴の皆様におかれましては、お配りいたしました懇談会の傍聴に当たっての注意事項のとおり、ご協力をお願いいたします。

以上でございます。

**【堤座長】** どうもありがとうございました。

それでは、議事に入ります前に、配付資料について、事務局から確認をお願いいたします。

**【小野事務局長】** 本日、お手元にお配りしております資料について、ご確認させていただきます。

まず1点目、中根委員からご提供の資料でございます。オーケストラの魅力とその伝え方、ベルリンフィル及びコンツェルトハウスの幼児音楽教育プログラムというものが1点。

それから、その下に、こちらの懇談会の報告書の構成について、構成案の資料が1枚。

それから、その下にTOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2019サラダ音楽祭。これは本年5月17日付のプレスリリース、それからチラシ。

最後に、東京都政策連携団体活用戦略「東京都交響楽団」の部分の抜粋の資料。

以上が本日の配付資料でございます。お手元の資料をご確認いただければと思います。不足等ございましたら、お申し出ください。

また、ファイルの基礎資料集の中には、平成30年度、昨年度の事業報告書、それから財務諸表、そして今年度、31年度事業計画書及び収支予算書、さらには東京都交響楽団中期経営計画の2018年度、昨年度の実施状況、そして前回、第4回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会の議事録、こちらを追加してございます。ご確認いただければと思います。

配付しました資料のうち、TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2019、サラダ音楽祭。こちらと東京都政策連携団体活用戦略、東京都交響楽団の部分につきまして、事務局より説明させていただきたいと思います。

**【小川GM】** それでは、サラダ音楽祭について、プレスリリースの資料と、それからチラシをおつけしてございます。

チラシをごらんいただければと思いますが、まず今年度につきましては9月14日から16日までをメインプログラムとして、9月のシルバーウィークの3連休に実施いたします。それからスペシャルコンサートといたしまして、9月19日と10月27日を予定してございます。

裏面に主なプログラム、コンサート関係を記載してございます。

こちら、チラシの裏面でございますが、まず「OK！オーケストラ」、赤ちゃんも入場

可能なコンサートということで、昨年非常に好評いただきましたので、9月14日に2公演を予定してございます。

それから、その右に音楽祭メインコンサートとしまして「ロメオとジュリエット」、これを9月16日に開催いたします。

その下に、ベビーオペラ『ムルメリ』と書いてございますが、赤ちゃんを対象としたオペラということで、こちらにつきましては3日間、それぞれ2公演、3公演を実施するという予定でございます。

それから東京芸術劇場のオルガンを使いました「オルガンでLet's SaLaD!」オルガンコンサートを9月15日に開催する予定です。

そのほか、この3日間につきましては楽器体験や歌、ダンスなどのワークショップですとか、会場周辺、駅ですとか商業施設等でのミニコンサートなども実施するという予定にしております。

その下に「サラダ・スペシャルコンサート」ということで、一つは9月19日にドラクエのシンフォニックコンサートということで、ドラクエコンサートを予定してございます。

それから、「SaLaD野外コンサート」（仮称）というふうにしてございますが、10月27日、日比谷の野音、こちらで野外のオーケストラコンサートを実施するという予定にしております。

簡単ではございますが、今年度のサラダ音楽祭のご説明をさせていただきました。

続きまして、もう一点の配付資料で東京都政策連携団体の活用戦略というものを、その次におつけしてございます。こちらについて、若干ご説明させていただきます。

東京都の政策連携団体というのは、都の関係する団体のうち、都政との関連が特に強い団体を東京都のほうで東京都政策連携団体というふうに指定してございます。都響につきましても、東京都の政策連携団体というふうに指定されてございます。東京都のほうで今年5月に各団体の活用戦略というのを定めましたので、その内容について、皆様にご説明させていただきます。

お聞きいただきまして、まず1枚目のほうが都のほうの政策展開ということで、局が目指すべき将来像というところが記載されてございます。局の目指すべき将来像として、東京2020大会に向けて都内各地で多彩な文化プログラムを展開するという。それから、あらゆる人々がともに芸術文化を創造し、日常的にアートに触れ合うなど、文化の魅力であふれる都市東京を実現するという。こちらが東京都としての文化振興施策の

将来像になります。

その下に、施策の現状ですとか課題とかを記載してございますが、下段に将来像に向けた今後の取組というところで、都民の幅広い層に質の高い音楽文化を継続的に普及させ、あらゆる人々に芸術文化に触れる機会を創出する。それから、オーケストラの生演奏の迫力を届ける音楽鑑賞教室の実施等を通じて、2020年以降を見据えて次世代を担う子供たちの育成に寄与していくということ。それから文化プログラムの中核を担うイベントとして実施する、今ご説明いたしましたサラダ音楽祭等により、誰もが参加し、音楽に親しめる音楽文化を振興していくといったところを東京都として掲げてございます。

その次のページが、こうした局の目指すべき将来像を踏まえて、各団体をどのように戦略的に活用していくかという考え方、都響をどのように都として活用していくかという考え方が示されてございます。

局が目指す団体の将来像ということで、上段に、「あらゆる人々に良質な音楽に触れる機会を提供し、芸術文化都市東京の実現に寄与するオーケストラ」というところ、このフレーズが局が目指す団体の将来像ということになってございます。具体的には、質の高い演奏活動を通じて音楽芸術を普及向上するというところ、それから教育・社会貢献に資する演奏活動等によって、年齢や場所などにかかわらず、さまざまな人々に良質な音楽に触れる機会を提供するというところ。それから、都響の良質な音楽を世界に広げて、東京の文化を国際発信していくということ。こちらが掲げられてございます。

その下に、戦略的活用に向けて強化・見直していく団体の機能と今後のステップということで、短期、中期に分けて記載がございまして。短期というのがおおむね東京2020大会に向けてということになってございまして、短期的には東京2020大会への貢献ということで、文化プログラムへの貢献ということでサラダ音楽祭の拡充ですとか、都民に幅広い音楽文化を普及するというところ、多摩・島しょ地域や病院などへの出張演奏、それから音楽鑑賞教室の継続実施というところが記載されてございます。

中期的には良質な音楽のさらなる普及向上ということで、定期演奏会などの質の高い演奏活動を積極的に展開するというところ。それから、幅広いジャンルの演奏や出張演奏活動の充実を求めるとともに、大会を契機に開催したサラダ音楽祭について、その定着化を目指して、誰もが気軽に音楽に触れ、あらゆる人々が音楽に親しめる社会基盤を構築していくということ。それから海外公演などによって、国際社会における東京のプレゼンスを向上する役割を担うといったようなところでございます。

東京都の側から見た団体の活用戦略ということが今般、策定発表されましたので、ご紹介させていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

それでは、ただいまの説明につきまして、確認したい事項やご質問等がございましたらお願いしたいと思います。そしてご意見につきましては、後ほどのご発言の中でお願いいたします。いかがでしょうか。

【吉本副座長】 サラダ音楽祭、ことしもとても楽しそうなんですけど、これは昨年度よりも事業内容全体を拡充されているということでもよろしいでしょうか。

【小川GM】 失礼いたしました。昨年度のサラダ音楽祭は9月17日の1日間の開催でございました。今年度につきましてはメインプログラムを3日間開催と、スペシャルコンサートを2日ということで、日数、規模も拡大しています。さらに、場所も昨年度は池袋エリアということで、東京芸術劇場と、その周辺ということでございましたが、今年度のミニコンサートにつきましては上野ですとか新宿ですとか、また多摩地域もちょっと探してございますので、そういったところ、都内各地でミニコンサートを、これは3日間の前の、事前のコンサートになりますけれども、そういったところでも開催を予定してございまして、また野外、日比谷の野外でもコンサートを行うということで、場所的にもエリア的にも拡大して実施する。またプログラムも、ワークショップもかなり数をふやして実施するというふうに考えてございますので、そういった意味で充実してやっていきたいと思っております。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

そのほかにどなたかございましょうか。

(なし)

【堤座長】 ございませんようでしたら、次に入らせていただきます。

お手元の議事次第に従いまして、第5回有識者懇談会のテーマでございます、オーケストラの魅力とその伝え方について、私と中根委員からプレゼンテーションがございます。先ほどもお願いいたしました、ご質問やご意見につきましては、委員のプレゼンテーションが終わってから時間をとりたいと思っておりますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。

では、私から始めさせていただきます。

オーケストラの魅力とその伝え方というタイトルですが、私は実際の宣伝等ではなく、

いわゆるプレイヤーの立場から見た可能性をいろいろと考えてみました。例えばプレイヤーとしてどういうことができるかとか、長い目で見たお客様へのアプローチです。

オーケストラ音楽のすばらしさは、一言で申しまして音の響き、そのものが土台でありますし、よく知られた、すぐれた作品が多いことだと思います。もちろん指揮者の存在はとても大事であり、魅力ある指揮者がオーケストラ独特のすばらしさや本質をつくり出して、音色をつくり出していくことによって、自然に自分たちのオーケストラは特別なオーケストラという気持ちを起こさせます。

オーケストラの演奏では、飛び抜けたアンサンブル能力が必要とされ、それは長年の室内楽活動がベースとなります。そして、生きている演奏であることが肝要だと思います。ただ再現するだけではなく、再創造であるぐらいのものを要求されます。東京都交響楽団の立ち位置といたしましては、都響としての特長を生かしたブランドイメージをつくり上げることです。

その大きな一つは、誰からも世界のトップクラスのオーケストラだと見てもらえることです。私たちは常日ごろから、いかにクラシック音楽を浸透させていくかということに努力を払っているわけですが、グッズの発売とか、テレビの出演などによって、常に聴衆とともにあることが大切だと思います。

また、メンバー、楽員ですが、よりインターナショナルになることによって、それまで存在しなかったような多彩な表現力が生まれてきますし、また単にエキストラとして雇うだけでなく、オーケストラ・アカデミーのようなものを通じて将来のオーケストラ・プレイヤーを育てることも欠かせません。また、幅広い活動をすることによってメンバーの感性が磨かれ、音楽の本質とか社会における役割がよりはっきりとわかってくるのではないかと思います。

また、これは大事なことです。音楽家自身にとりまして十分な生活保障をさせる環境が不可欠です。そうすると、それが人々がルックアップするようなプライドを持てる環境になってまいります。マスタークラスやアウトリーチ活動は、自分たちの身近なオーケストラというイメージをつくり上げる上でとても大切です。それは全ての面でパーソナル、そしてパーソナブルなものになることです。また、ダイバーシティ、イーチフレンドリー、パーティシペーションという基本コンセプトを大切にしていかなければなりません。

エデュケーション活動ですが、早いうちから子供たちにより音楽に親しんでもらうのは、いろいろな意味でエッセンシャルだと思います。それがすばらしい思い出となって、将来

のお客様になってくれるでしょうから。そして、子供たちの感性とか未知のものへの対応能力は無限のものです。それにチャレンジするようなプログラムを組むことも一つのアイデアでしょう。

また、作曲活動などの創造の場を共有することはとても意義のあることですが、皆で何かをつくり共有するためには、絵画とか、他の芸術分野とのコラボレーション、あらゆる可能性の追求、幅広いパートナーシップの築き上げが大事だと思います。

音楽の持つ本質的な力ですが、被災地での演奏などによって、音楽の持つ内面的な力を再認識することが可能です。音楽は人の心に直接届くというか、響くからです。そして、常にミュージック・イン・マインド、いつも自分の中に音楽があるという状態になれば、それが理想的です。

また、インバウンド対策の重要さも忘れてはなりません。在留外国人並びに外国人訪問客へ向けてアプローチするコンスタントな努力をすることによって、客層が広がっていく効果があります。東京都交響楽団のプログラムは日本語、英語の両国語で書かれており、それなりの成果を認めることができます。

また、アジア諸国に関してですが、発信に努めることと連携を深めることにより、他都市との交流を進めていくことも大事でしょう。そして、もっと活発に海外への演奏旅行をすることによって、国際交流にもなりますし、それが逆に国内での認知度のアップともなります。また、それらの活動により、若い世代によい意味での刺激を与えることとなります。外へ出ていく姿勢を促すとも言えましょうか。

もう一つの大事な要素はイノベーションです。カーネギーホールなどの海外の名門ホールでも、長い歴史や伝統があっても、それにあぐらをかかず、常に新しいもの、エトヴァス・ノイエスを求め、工夫を重ねているのはとても立派なことだと思います。しかも、常に人の興味を引き続けるという意味でも大切なことです。

都響の強みである現代作品の演奏ですが、これによって時代の先端を切り開いていくという気概を世間に示すことができます。また、現代作品への反応を見ておきますと、若い世代のほうが自然に受け入れやすいようで、これは客層の若返りにもなるでしょう。そのとき、現代作品はおもしろいという印象を与えることが大事です。

客層を広げる努力に関しましては、終日のアフタヌーン・コンサートなど、女性や高齢者向けの気配りが効いたプログラミングをすることと同時に、バリアフリー・ゾーンとか託児所の設置なども大事だと思います。しかもソーシャル、個人との音楽的なつながりを

求め、称賛するファンの広がりがあると、ますますよいのではないのでしょうか。ファンの皆様との集いなどを開かれたらいかがでしょうか。

そして、国としての立ち位置ですが、より積極的な支援をお願いしたいと思います。せっかく文化立国というテーマがあるのですから、そして日本は他の国と比較して芸術文化に対する予算が少ないので、これは早急に是正すべきだと思います。

音楽会そのものに関してですが、音楽会に安らぎを求めるという要素もあります。なじみのある音がしていると、聴き手に安心感を与えます。社会のIT革命などが進めば進むほど、人間性そのものを養い、人間としての器量を問う音楽芸術的な素養はますます大事になってきます。感謝の気持ち、これは過去です、そして慈しみの心、これは現在、そして祈りの気持ち、将来ですね、その表現が基本となり、曲目解説などを含めて、いろいろなことが、より身近に、そしてカンフォータブルに感じられるようになれば、自然に音楽会に行ってみようという気持ちになるのではないのでしょうか。そのためには、会場内外での雰囲気だとか、ドリンクコーナーを含めた、人が出会うソーシャルな場としての位置づけも大切だと思います。

やはり、オーケストラメンバーの個人個人の方の魅力というものがすごく大事ですし、そういう方たちがすばらしい演奏をすることによって、ある意味で、大きな意味でのファン層を広げていくことにもなるのではないかと思います。

気がついたことをいろいろと述べさせていただきました。しかも英語の言葉が多くて申しわけなかったと思いますが、少しでも役に立てれば光栄に存じます。ご清聴ありがとうございました。

それでは続きまして、中根委員お願いいたします。

**【中根委員】** ありがとうございます。堤座長の大変高尚な話の後に私が話をするのは、何か気恥ずかしい気もいたしますけれども。先月初めに実は別件でベルリンに行く機会がございまして、せっかくベルリンに行くので、ベルリンの名門の演奏楽団でありますベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、それからベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団の方に、事前に、都響の有識者懇談会というのをやっていて、オーケストラの魅力とその伝え方、オーケストラのファンをふやすためにはどんなことをしたらいいかということについて、何かそちらのほうで、ベルリンのオーケストラのほうでやっておられることなどがあれば聞かせていただきたいということでアポイントを申し込んでおりましたところ、たまたまだったんですけれども、二つの楽団とも、青少年教育プログラム担当の方がお相手し



ますということで、出てこられました。

もちろん両楽団とも、教育プログラム以外にもオーケストラへのアクセスをできるだけ高めるという観点から、さまざまなプログラムを用意しているというお話もありました。コンツェルトハウスのほうでは、シニア向けにエスプレッソ・プラス・マチネコンサートという短時間で高齢者も参加しやすい形のプログラムを実施しているとのことでした。ベルリン・フィルのほうでは、若者向けに昼休みの時間を使った短時間のランチコンサートを開催したり、あるいは平日の夜、非常に遅い時間帯に現代音楽と舞踊といったようなコラボの実験的な試みをやって、若者をできるだけ引きつけるというようなプログラムやっているということだったんですが、両楽団とも今非常に重点を置いているのは幼児音楽教育プログラムであるということで、こうした点を強調されていたのが印象的でありました。

幼児音楽教育、あるいはこのほかにも地域での社会貢献ということも非常に重視しているという話がありました。こうした幼児教育プログラムということになると、ベルリンの二つのオーケストラも、前回の懇談会で吉本委員のお話の中にありましたロンドン交響楽団の活動というのを非常にいいお手本としてやっているとのことでした。イギリスの状況については以前に後藤委員からもご説明がありました。私は今回ベルリン・フィルとコンツェルトハウスが幼児音楽プログラムをやっていますということを短いペーパーにまとめてみました。以前の懇談会でのお話と重複してしまっただけなんですけれども、イギリスだけではなくて、ドイツの著名なオーケストラにとっても、幼児教育、青少年教育プログラムというのが非常に重視されているということの一つの例になるということをご紹介します。多少なりとも意味があるかなと思った次第です。

まず、ベルリンへ行って、二つの楽団の担当者にあつたのは6月3日でした。コンツェルトハウスのほうには青少年教育チームというのができております。

紙に沿って、2ポツにありますけれども、コンツェルトハウスでは90年代に教育部門を設置して、幼児音楽教育プログラムを実施するようになってきている。今、このチームには、今回お会いしたメリッヒさんという青少年教育担当官と、もう一名の正規職員と、5名のアルバイトでユニットを構成しているということでございます。

資金は、これはなかなか日本から見るとうらやましいんですけれども、富豪の女性の寄附でほとんどを賄っているということでございます。

教育プログラムは年に何回といったような単発的な行事ではなくて、演奏会のワンシーズン、9月から次の年の6月までですけれども、通して、約90ぐらいの幼児音楽教育に

特化したプログラムを用意しているということです。コンツェルトハウスもベルリン・フィルもそうですけれども、自前のコンサートホールを持っているという強みがあります。特にコンツェルトハウスには大ホール以外にも小さな演奏会、室内音楽が演奏できるような部屋が幾つもあるので、子供のためのプログラムを頻繁に開催することが可能だということでございます。

それから、すみません、後先になってしまいますけれども、1番目の、そもそもの問題意識ですけれども、ドイツにおいても音楽会での観客数の減少傾向は著しくて、特に若者のクラシック音楽離れが非常に深刻になっており、交響楽団の将来は子供たちにかかっているといっても過言ではないというようなことを強調されていました。音楽教育は早く始めれば早いほど、子供たちは自然な形で音楽へのアクセスを持つことができる。これは先ほど堤座長のほうからもお話があったとおりでございますけれども、彼女が言っていたことは、子供は10から12歳ぐらいになると関心分野が多岐に広がって、例えば芸術面では演劇とか美術にも関心を深める傾向がある。したがって、その前にできるだけ音楽の基礎をしっかり子供たちに刷り込むことが重要だということ。これは期せずして、後で申し上げますが、ベルリン・フィルの担当の方も同じようなことを言っていて、12歳ぐらいまでにしっかり音楽の素養を植えつけたいということを強調されていました。

コンツェルトハウスのほうのプログラム、3番になりますけれども、3歳児以上、4歳児以上、6歳児以上、小学校1年生から、日本で言えば高校1年ぐらいまでの年齢に当たる幅になりますけれども、そういったものを用意しているとのこと。

カテゴリーとしては、二つのプログラムがあって、こうしたプログラムを子供向け用ということをつくっておきまして、一つが家族用、もう一つが学校単位、学校とか保育所単位のものというふうになっていて、当然ですけれども、家族用については週末に実施することが多くて、学校単位、保育園単位等の行事は平日に行っているということです。プログラムの中身自体は同じものを行っているということです。

プログラムの内容ですけれども、4ポツに書きましたが、プログラムの内容は子供の関心を引くような絵本、あるいは児童書等のキャラクターを利用して、これをいろいろな音楽と結びつけた形で実施するものが多いということ。それから、コンツェルトハウスの会場で実際に楽器にも触れてもらったり、あるいは練習風景を見学させるといったプログラムもあるということです。高学年用には、子供オペラやゲネプロ鑑賞というものも含まれているようです。

それから、これはベルリン・フィルの人も言っていましたけれども、楽団はエリート集団ではないということの意識を強く持って、社会的な貢献もするという事で、障害者施設であるとか孤児院等の社会的弱者、貧困地域にも目を向け、そういったところにも出向いて行って、簡単な演奏会等を実施しているということも強調されていました。コンツェルトハウスというのは、東西ベルリンが分かっていた時代は東ベルリン地区にあって、今でも特に旧東ベルリン市民になじみの深いということで、逆にベルリン・フィルのほうは西ベルリン側にあって、自由を守る砦みたいな存在で、今も旧西ベルリンと地域的つながりが深いということもございますけれども、そういうこともあって、地域に根差した活動に重点を置いているということです。

前回の懇談会場で楽団員が通常の質の高い演奏活動をするということでのいろいろ努力していくことに加えて、さらに社会的貢献であるとか教育プログラムをオン・トップでつけ加えていくことまでしなくてはならないのかという議論がございましたけれども、先方に問題意識を伝えましたら、いや、そこはドイツも同じで、いろんなことにトライしてみても、この指揮者だったらゲネプロに例えば子供を呼んでも大丈夫というような人、あるいはいろんな学校に行き、子供たちに解説をして、演奏もして、楽器に触れさせたりするというようなこと、そういった教育活動に非常に熱心な楽団員というのは日ごろの付き合いから何となくわかるので、そういう人に重点的にお願いして、やっていますということで、あくまでも余り押しつけにならないような形でやることに配慮しているという話がありました。

それから次に、ベルリン・フィルのほうの話ですけれども、こちらは教育チーム長のプロフェッサー・トーパーにお会いできました。やはり彼女が強調していたのも、子供に音楽を根づかせるには12歳くらいになるまでの教育が決定的に重要であるという点でした。ベルリン・フィルでは2002年に教育部門が発足。この分野での歴史は、ロンドン交響楽団とかに比べて大分浅いんですけども、現在はプログラム企画担当が5名、プログラム・マネジメント1名、アシスタント1名、それから合唱プログラムというのにベルリン・フィルは力を入れていて、これを担当する人が4名いるということです。

ベルリン・フィルは30年ほど前から、冠スポンサーであるドイツ銀行から支援を受けていますけれども、サイモン・ラトルが首席指揮者に就任した際、教育プログラムのための支援増額を要求して認められたとのこと。以降、外部の教育者の協力も得つつ、学校教育等を重視するようになってきているが、サイモン・ラトルのように、大局的な観点

から楽団の将来を考えて、どういうところに投資すべきかという決定をするうえで大きな影響力を持つ人がいて、大変よかったということです。首席指揮者がオーケストラの将来をどう考えるかは、決定的な重みを持つというお話がございました。

それから、教育プログラムの主要なものとしては、家族向けということでファミリーコンサート、1時間程度の演奏会をやって、その後、楽器に触れたり、一緒に歌ったりするという。いろんな工夫を凝らしていきまして、シーズンごとに重点分野を変えて、先シーズンは、例えば弦楽器、それから合唱を重点的にプログラムの中に取り入れたということです。それから、ファミリーコンサートとは言え、子供が6歳ぐらいにならないと一緒に連れていくのはなかなか難しいので、小さい子供のためには別途、ベビーシッティングの提供もあって、こちらのほうも音楽の専門家がいて、赤ちゃんなりに受容できるような、いろんなプログラムを考えていますということでした。

それから、子供の中でも特に音楽好きというような子供たちには、さらにフィルハーモニーの舞台裏の見学であるとか、オーケストラの構成、活動等の紹介等を90分程度で、オーケストラというのはこんなことを毎日しているんですよというような紹介プログラムがあったり、あるいはさまざまな音楽テーマに関するワークショップ、一緒に演奏もさせたり、他の芸術との組み合わせで、音楽でこんなことができるんだよというようなことを紹介したり、あるいは文化の異なる国の音楽についても教えたりするというような、いろんなワークショップをやっているということです。

それから、学校の長期休暇を利用したプロジェクトというのもやっていて、音楽に余り知識がない若者にも音楽をよりよく知ってもらおうということで、休み中に何回か出てきてもらって、いろんな活動をしているということです。

それから、先ほど申しあげましたベルリン・フィルでは合唱プロジェクト、これは英語で言えばヴォーカル・ヒーローズというのだそうですが、こうした非常にユニークな試みをやっているとのこと。2013年以來、ベルリンのいろんな地区で結成されていて、6歳から参加でき、子供、青少年の合唱団もあれば、さらにはもっと広い年齢層、9歳から99歳までとなりますけれども、そうした人たちの合唱団というのもあって、子供たちの合唱プロジェクトは学校の行事に参加したりとか、あるいはクリスマス会の際に合唱するといったようなものですが、より年齢層の広いオーケストラの場合は練習の成果をベルリン・フィル・オープンハウスのときに、正規指揮者の指揮のもとに大ホールで演奏したりして、実際に合唱団の参加者のみならず、それを一緒に聴く、聴衆たちにも非常

に強いインパクトを与えていますとのことでした。

それから、そのほかにも才能ある若者向けに作曲の指導といった活動もしているとのこと。これは事前に作品を送ってもらって、その中から選抜して行って、最終的に指導が行われた後に、でき上がった作品の中ですぐれたものについてはベルリン・フィルの楽団員あるいはカラヤン・アカデミーの奨学生等による演奏が行われるということです。

それから、コンツェルトハウスと同様に、保育園とか幼稚園、あるいは学校にも出かけて行って、いろんな形での音楽教育をやっているということです。特に、保育士が日常、音楽教育指導するための研修にも力を入れているということです。

他方で、楽団員が現地に出かけていくのに呼応して、フィルハーモニーにも呼んでゲネプロを鑑賞してもらったり、あるいは非常に小さなコンサートを、子供たちにとっては人生で初めてのコンサート体験というようなこと、プログラムもつくっているということでした。

それから、学校向けにはさらに、音楽のみならず、フィルハーモニーの建物は非常にユニークな建物で、これが音響的にどういう効果を与えているのかというようなことも含めて、そういうことを説明するようなプログラムをつくっているということです。

それからもう一つ、社会的貢献というのをベルリン・フィルも非常に重視しておりまして、ベルリン・フィルのパンフレットの中にも書いてありますが、ベルリン・フィルは決して象牙の塔に閉じこもるべきではない、これは先ほど説明した、コンツェルトハウスの方の発言、すなわち楽団員は決してエリートであるという意識を持つべきではなくて、もっと社会に貢献すべきだということと通じるものだと思いますけれども、社会的な活動に積極的に取り組むことが重要だということで、非常にいろんなことをやっています。孤児院であるとか高齢者施設のみならず、変わったところでは刑務所等の施設訪問で、特にそういう刑務所に収容されている人たちに、共感を与えるようなプログラムを準備して実施してきているということです。

それから、これはドイツにおいて昨今、難民問題というのが重要な、社会的な問題になっていますけれども、ベルリンはドイツの中でも割と、いろんな問題はありますけれども、雰囲気的には難民を受け入れて、自分たちの一員として受けとめようという動きが流れとしてあって、ベルリン・フィルもそれに呼応する形で、異文化で育った人たちをドイツの社会に統合させていくという観点から音楽は非常にいいバックボーンになりうるという観点から、こうした難民のバックグラウンドを持つ人たちをベルリン・フィルのコンサートに

招待することを通じて、彼らがいろんな形でドイツの社会に参加して助けにしたいということに重きを置いているというようなお話がありました。

以上がベルリンの二つの楽団が、特にオーケストラの将来を考えるに当たって、これからどんどん、もっと重点を置いていきたいと言っていた教育プログラムの内容でございます。

それからあと、配布資料から離れますけれども、先ほど堤座長のお話にもございましたけれども、国と国ということ、外交という観点から、オーケストラが果たす役割があるのではないかとこのことをちょっと申し上げて、締めくくりさせていただきます。今期の都響のプログラムを見ていますと、日ポーランド国交樹立100周年であるとか、日オーストリア友好150周年記念プログラムというのが組まれていて、これは大変いいことだと私は思っています。というのは、国と国の関係で一所懸命に活動している組織として、日ポーランド友好協会とか、日オーストリア協会とかがあるんですけども、こうした人たちは普段はそれほどクラシック音楽に縁がない人もいるんですけども、こうしたタイトルが付してあると、そういうプログラムがあるなら、ぜひ聴いてみようという気になるという話を何回か聞いたことがございますし、逆に、クラシック音楽ファンの方には、こうしたプログラムを機会に、日本と外国との深いつながりを改めて知ってもらう機会にもなると考えるからです。

今回行ったベルリンでも、コンツェルトハウスが実はベートーヴェンの第九の日本初演100周年記念の年に当たる昨年、ベートーヴェンの第九を演奏しましたが、その実現にベルリンの日本大使館が大変努力したとのこと。第一次世界大戦が終わったときに青島にいたドイツ人兵士を戦勝国である日本の鳴門の俘虜収容施設に捕虜と住民との交流というのが「バルトの楽園（がくえん）」という映画になっていて、日本では割と知られているんですけども、ドイツではほとんどと言っていいほど知られていませんでした。しかし、去年、そうした第九が日本のみならずアジアで初演されたのが、実は1918年の鳴門が初めてだったということの説明を加えて、この演奏会を開催したところ、大きな反響があったと聞きました。あらためてドイツと日本との深い関係ということを通じて皆さんに知ってもらう機会になったということがございました。

そういう意味ではぜひ、こうした音楽を使って、二国間関係をさらに促進していくということも非常に重要なことだということを付言しまして、私の報告とさせていただきます。

**【堤座長】** どうもありがとうございました。

それでは、意見交換に移りたいと思います。ご発言の委員へのご質問等を含めまして、積極的にご発言、ご意見をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

【後藤委員】 ありがとうございます。

直接関係するかどうかわかりませんが、ちょっと問題提起として。

今のベルリンの話で思い出したのですが、来年のオリンピック2020年記念事業の一つとしてベルリン・フィルを呼ぶという話が、先週ぐらいにメディアに出ていると思うんですけども、それに対して私がふだん見ているようなソーシャルメディアでは、ここに日本のオーケストラが入らなかった、目玉企画にベルリン・フィルを呼ぶというのはどうなのだというような議論がありました。もちろんいろんな事情もあるでしょうし、招聘の方の思惑もあるでしょうけれど、都響としてはやっぱり前回のオリンピックのレガシーとして出てきた団体なわけで、それでも、オーケストラの皆さんが努力してもどうしようもないのかもしれないですけど、この件について、皆さんのご意見をちょっと伺ってみたかったかなと思いました。

一つ思ったのは、私もプレスリリースをパラッと見た感じなんですけど、やっぱりヴァルトビューネ、ドゥダメルとベルリン・フィルという組み合わせでヴァルトビューネ式の野外コンサート、ここがやっぱりアピールとしては大きかったのかなと感じました。日本でなかなか野外コンサートは定着しない部分がありますよね。気候もあるし、夏は暑いし、今回のサラダも雨天の場合はどうするのかという心配はあります。ヨーロッパの人たちは相当な雨天でも、ザーザーぶりの雨の中のシェーンブルンとか、ヴァルトビューネとか、皆さん、かっぱを着てやっていますけれども、たしか去年だったか、おとしだったか、N響さんが映画音楽のコンサートを外でやろうとしたら雨になって中止になってしまい、尾高先生がたいへん残念がっていらっしやいました。やっぱり野外で、しかも無料かどうかは知らないですけど、野外コンサートというのはアピールとしては大きいのかなということなんかを、ちょっとつらつらと。

質問というほどじゃないんですけど、ほかの委員の皆さん、また都響の皆さんのお考えをお伺いできればと思いました。

逆にベルリンフィルの人たちは、2020年に日本に行けるので、すごく喜んでいるという話も漏れ聞くので、彼らにとっては東京オリンピックの公式行事の一部に参加できることが嬉しいのでしょう。そういう意味では、もちろん交流として悪いことではないと思っ

【吉本副座長】 それはそれとして、都響は都響として前回五輪のレガシーであるということ誇りに、独自のプログラムをガンガンやればいいだけの話だと、私は思いますけど。

【小川GM】 野外公演の話がございました。日比谷でサラダ音楽祭を予定してまして、こちらは無料で予定してございます。ですので、雨天の場合はちょっと中止というような形で今は予定してございます。

【後藤委員】 その判断がまた難しいですね。どの時点で中止するとか。

【堤座長】 これは余計なことかもしれませんが、私自身、ヨーロッパで幾つかの野外コンサートを弾かせていただきましたけど、特に先ほどおっしゃってありましたように、気候とか、いろいろ、野外は夜になると急に温度が下がったりして、特に私なんかは弦楽器なので、もろに影響を受ける。例えば調子が狂ってきてしまったりとか、そういうことで、私自身も、ある曲の途中で首席チェロの方からチェロを借りて弾かなきゃならなくなったりとか、それから湖畔のすごくきれいなところで演奏していましたが、そういうお城のあれだったんですけど、お城がちょうど湖に面していて、そこを開放していたんですけど、練習のときはよかったですけれども、本番の時間になったら、今度は風が湖から吹いてきてしまって、全く音がお客様のほうに行かなかったことが、後ろへ行っちゃった、そういうことはありました。でも、イベントとしては大変おもしろいことだと思います。

【吉本副座長】 すばらしいプレゼンをいただいたので、幾つかインスパイアされて、ちょっと発言したいと思います。堤座長から本当に包括的なお話をいただいて、横から拝見すると、ちゃんとテキストを書いているので、そのまま出せば、この懇談会のまとめになるという気がいたしましたけど、その中で、たしかインバウンドのお話があったと思います。

今、ナイトタイムカルチャーとか、それから外国から来た人が夜に楽しむ場所がないみたいなことがよく議論されていて、先日、トリップアドバイザー社長の牧野さんにお目にかかって、話を聞く機会があったんですけど、日本人で海外旅行する人と、海外から日本に来る人の最大の差は、日本人は例えばパリに5日いるというと、全部を予定を決めていますよね。外国人は東京に5日いるとなると、その間の予定は来てから考えるそうなんです。なので、トリップアドバイザーでおもしろいところを見つけて、ここはおもしろそうだとこのところに行くと。今、トリップアドバイザーでチケットを買えるような仕組みを導入していて、今一番東京で人気があるのはロボットレストランだというふうに言っていました、新宿にあるんですけど。混みぐあいも出ていて、そこでチケットをブックン



グできるらしいんですね。その仕組みをどうつくっていくのか、なかなか難しいと思うんですけど、今は何せSNSの時代ですので、都響だけではなくて、東京都の都立の文化施設も含めて、足並みをそろえてどういう取り組みをどうするのかということを、検討できれば、と思いました。きょうは都の政策連携団体活用戦略も出ていますので。

それからもう一つ、これは堤座長のお話でも中根さんのお話でもあったんですけど、子供たちに向けたプログラムということで、これは私のプレゼンでもぜひ進めたらいいなと思ったんですが、都響の場合、現実を考えると、都立なので、小・中学校と直接つながるというのはちょっと難しい部分がありますよね。都響の本拠地が台東区だとすると台東区なのか、あるいは池袋やサントリーホールでも定期をやっているの港区や豊島区まで広げるのかとか、小・中学校とのつながり方というのを現実問題として工夫する必要があるのかなというふうに思いました。それが2点ですね。

3点目は、社会貢献という話が出てきていて、たしか刑務所に行くとか、あるいは堤座長のお話でも対象は分け隔てなく、社会貢献できる体制が必要だということだったと思うんですけど、上野だと例えばホームレスとか、あるいは失業している方とか、そういう人たちに音楽を聴いてもらうチャンスを提供するというのがもしできたら、相当画期的なんじゃないかと思うんですね。

ホームレスに関しては、イギリスにストリートワイズ・オペラというのがありまして、ホームレスがオペラをやるという活動を推進しています。実は代表のマットさん、ブリテイッシュ・カウンシルの招聘で何度か日本に来ているんですけど、都立の美術館でもやっぱりレクチャーしていただいて、今、都立の美術館がたしか「とびらプロジェクト」というので、いろんな都民と、子供たちを含めて、どう近づくかというのをやっているんですね。ひょっとしたらそこでもホームレスへのアプローチを検討しているかもしれないので、都立の美術館あるいは都響でそういうアプローチができないかというのを検討してみる価値はあるなというふうに思いました。

それともう一つ、ベルリンフィルのお話で、教育プログラムをやることでドイツ銀行の支援がふえたということがあって、民間企業のファンドレイズはやっぱり子供たち向けの教育プログラムとか、あるいは社会貢献的なプログラムだと、企業のほうから見ると、音楽を支援するんじゃなくて社会的な活動を支援する、ということでやりやすい。今、多くの企業がSDGsとか、あるいはESG投資ということにすごく敏感です。ESGは、Environment、Social、Governanceですが、そのうちSという

のが難しいらしいんですよ。E S G投資のSの部分で都響を支援してくださいというようなことをやると、教育プログラムに関しても可能性があると思うんですね。

これはちょっと今思いついた、冗談みたいなアイデアなんですけど、これを見ると都響は民間の支援も得ていますけど、やっぱり東京都がスポンサーだからといって、民間からの資金調達は結構大変なんじゃないかと思うんです。サラダプロジェクトに、味の素とかキューピーマヨネーズなんかから支援をもらうのはどうかなと。実際、お母さんも一緒に来ますよね、子供たちと。そういうターゲットを踏まえたスポンサー獲得を、ぜひぜひやってはどうかと思います。都響の新しいプロジェクトですし、結構経費がかかると思うんですよ、そういうことにもちょっとチャレンジしたらどうかなというふうに思いました。以上です。

**【堤座長】** どうもありがとうございました。

そのほかにはいかがでしょうか。

**【石田委員】** 堤座長のお話を伺っていて、まるで音楽を聴いているような、美しい言葉でいろいろな課題を整理してくださっていたのを聞かせていただきました。

堤座長がおっしゃった中で、私が一番心に残りましたのは、ドイツ語でエトヴァス・ノイエスとおっしゃいましたことです。都響は、プログラミングでも、大野さんのお力もあって、非常に斬新な、画期的なというか、積極的なプログラミングをされていると私は思っていて、オーケストラの方々もテクニックを尽くして取り組んでいらっしゃると感じております。こういった作品を取り上げる上で、今、都響の存在なくしては音楽界は進んでいけないのではないかなというふうに思っています。

現代作品のおもしろさですとか、時代の先端を切り開くというようなことが都響の演奏から感じられ、お客さんにそのままダイレクトに伝わっていけばいいなと心から思っています。都響のそういったリーダーシップに今後も期待したいと思いました。

それから、国に対して予算拡大ですとか音楽家の生活保障をとったことですが、本当に世界的に大きな課題だと思います。アーティストの皆さんですとか、それからオーケストラ団体として、そういう言葉をきちんとした形で届けていく、それを大きな力に、うねりにしていくということは必要だと思います。ぜひ、この懇談会からもそういったメッセージが伝わるようになればいいなと思っております。

中根委員のベルリンからのご報告ありがとうございました。私もベルリンにはしばらく行っていませんけれども、そうだったよなど、いろんなことを思い返しながら聞いて

おりました。

ちょっとお伺いしてみたいのは、もしご存じでしたらでよろしいのですが、移民の問題がドイツでは大きな、本当に避けられない課題になっている。特にベルリンはやはりトルコの方が多いですね。オペラハウスでも、トルコ語でオペラを楽しめるようにするような努力も始まっていたりするんですね。オーケストラにおいて、そういった移民に対する直接のコミットメントというのがどういった形で行われているのかということ、もしお聞き及びでしたらお知らせください。両親がドイツ語をしゃべらない、しゃべれない子供というのが今、多い。そういった子供たちにオーケストラが、例えば室内楽を届けるといようなことをアウトリーチでしているという予測はつくんですけども、そういったお話というのはありましたでしょうか。

**【中根委員】** ご指摘ありがとうございます。確かに移民の問題というのはドイツは1960年代、経済が右肩上がりのときに労働力が絶対的に不足ということで、トルコを初め、当時まだEUに入っていなかったスペインとかポルトガルとか、そういうところからもどんどん入れて、バルカンからもたくさん来ていて、その中でもトルコ人はずっと住み着いている人が多くて、特にベルリンは、ある地区に行くと、冗談でここの地下鉄はオリエントエクスプレスと言われるぐらい、非常にトルコ人が多い。

これは具体的にベルリン・フィルの方が言っていたわけではないんですけども、特に社会的弱者の多い地域に楽団員が直接出向いて行って、いろんな指導をしていますということなので、恐らくそういう学校、ほとんどをトルコ人が占めるような小学校であるとか、そういうところにも出向いていっているのではないかと思います。

それから、実際のオペラをトルコ語でやったりとかというのは余り、直接には聞いていませんけれども。

**【石田委員】** 字幕を。

**【中根委員】** 字幕で対応するというのはあり得ますよね、今いろんなところでやっていますから、そういう形であれば対応できるだろうと思います。

**【石田委員】** どうもありがとうございます。国々によっていろんな課題があって、この国でやっているから日本でやればいいということは、私は余り思わない人間なんですけど、特徴のある課題への優れた取り組みは学ぶ必要があると考えています。都の政策連携団体活用戦略を読んでいて、どういうことを都として課題として持っていて、団体に何を期待しているのか、わかったような気にはなるんですけども、東京都ならではの課題がこの

中に含まれていると読み取るべきなのでしょう。それをどういうふうになら解決しようとしているのかということ、一言でいいのでお聞きしたいですね。

先ほど多摩地区でもやりますというお話がありました。実は八王子で、都響が演奏会をされたときに私は伺って見たんです。素晴らしいお客様がたくさん、温かい拍手を送られていたことに本当に感慨を覚えました。違うんですよ、上野で聞いているお客様の感じと。足を伸ばすのは大変だというのはよくわかるし、楽団員の方もやっぱり本拠地でやりたいというふうに思われると思うんですけども、でも地域での演奏会はとても大事なということを感じています。そういったことの認識というのをされているからやられているのだと思うんですけども。

東京都が抱えている、あるいは東京の社会あるいは子供たちが抱えている課題に対して具体的にどういうふうになら解決していこうと思っているのか、という戦略を、一言でいいので、いただけたらうれしいなと思うんですけども、何かそういった課題認識というのをおありでしょうか。

**【小川GM】**　そういう意味では活用戦略の中で、あらゆる人々に良質な音楽に触れる機会を提供するということが、具体的にそこに書いてありますが、年齢や場所などにかかわらずということ、実は多摩・島しょ地域というのは一つ大きな柱に。

**【石田委員】**　やっぱりそうですか。

**【小川GM】**　はい。

実は多摩・島しょ地域につきましては、主催公演として八王子でやっているものもございいますが、都の施策として、プレミアムコンサートというのを都から受託してやってございます。これが多摩・島しょ地域でのオーケストラ公演ですとか、村や町、島では小規模なアンサンブルの公演というのを都の施策として都響が受けて、演奏に伺っているといったようなことに、従来から取り組んでございます。

その中で、今回はサラダ音楽祭というところでも、池袋で昨年やりましたけれども、ちょっと局のほうからはぜひ多摩地域でもという話もございまして、なかなかオーケストラ公演ですと難しいところがございまして、小規模公演とかで多摩地域でも、まちなかコンサートをやるというふうになら今考えています。

**【石田委員】**　ありがとうございます。以上です。長くなりました、失礼いたしました。

**【堤座長】**　それでは、そろそろ時間ですので。

いろいろなご意見をいただきましてありがとうございます。本日のご意見を踏まえま

して、次回以降の議論を進めたいと思います。

ああ、ごめんなさい。どうぞ。

**【澤委員】** おくればせながら。きょう、堤委員と中根委員の大変すばらしい多岐にわたるプレゼンテーションを伺いまして、非常に感心いたしました。その中でお二人にやはり共通しているところで、特に中根委員のリポートにありました、ベルリン・フィルとかコンツェルトハウスというような世界の超一流のオーケストラが、次世代の音楽ファンの掘り起こしということに非常に力を入れているということにとっても感銘を受けました。

都響さんももちろんそれはやられているでしょうし、サラダ音楽祭もその一環だと思えますけれども、実は東京藝大は上野公園内に芸術こども園みたいなものをつくることを今ちょっと提案し始めていまして、博物館とか動物園、それから東京文化会館も含め、上野公園の各施設に来られる方たちが観賞している間に子供さんを預ける、そこでただ子供さんを預かるだけではなくて、藝大と、場合によっては都響さんなんかと協力して、その子供たちに芸術の超早期教育みたいなことができないだろうかと思っています。それは親御さんたちが心置きなく博物館や美術館あるいは演奏会を観賞できるということと、やっぱり次世代の音楽や芸術に興味を持つ子供たちをそこから育てていくという両面でやりたいということで、ちょっと台東区の方とも話をし始めているところです。

実はことしの4月に、お茶の水女子大に新しい国際交流会館ができたときに文京区の区長さんとお話することがあって、文京区はお茶の水女子大と組んで保育園とか幼稚園で非常に成果を上げているらしいんですけれども、そういう大学の持っている力と区のほうの力で子育て支援とかを実施されているということを知っていて、藝大でそれができないかと。それで、上野の各機関と協力し合って、上野ならではの芸術文化を子供のうちから体験できるようなこともできたらというふうに思っていますので、そういったこともまた今後、都響さんも交えてご相談できたらというふうに思っております。

以上です。ありがとうございました。

**【堤座長】** すばらしいお話をありがとうございました。

何か聞くところによりますと、藝大にも国際交流会館ができるかもしれないというようなお話をちらっと私は聞きましたけど。

**【澤委員】** その予定ではありますが、諸般の事情で延びております。

**【堤座長】** では、本日のご意見を踏まえまして次回以降の議論を進めたいと存じます。

それでは報告書の構成について、説明をお願いいたします。

【吉本副座長】 お手元の資料に報告書の構成案の資料が1枚だけあるかと思います。これは事務局の方と何度か議論したものです。

これまでの懇談会でそれぞれプレゼンテーションいただいた内容と議論をどんな項目に整理できるだろうかということを検討しまして、枠の中にあります大きな項目で五つ、そして小さな項目を合わせると20個前後だと思えますけれども、そういうふうに整理できるのではないかなということに今のところなっています。ただ、項目自体もまだ案ですので、きょうもプレゼンがありましたし、意見交換がありましたから、それも踏まえて項目自体も整理するということになるかと思えます。

まとめ方なんですが、今想定していますのは、例えば①経営の都響のビジョン策定というところに関して言うと、懇談会で出た意見に基づいて都響のビジョンに関してこんなふうな方向を目指してはどうだろうかというような、ある種の提案的なものを作成し、そのベースとなった懇談会での主な発言、それから現在の都響の現状、課題、都響のビジョンは今こういうことを掲げています、あるいは65年の設立時はこういうビジョンでしたという、そういうふうな形で整理してはどうかというふうに考えております。

そして、懇談会の発言なんですけれども、懇談会自体、全員で合意してこういう提案書をつくるということではないと思えますので、相反する意見というんですかね、両論併記のものがあれば両方の意見が出たということで併記する方向がいいのではないかなというふうに話をしております。ですので、ざっくばらんに言うとそういうことなんですけれども、多少、事務局からも追加でこの資料についてご説明いただいて、意見交換できればと思います。

よろしくをお願いします。

【小川GM】 それでは、今、大枠については副座長のほうからお話いただきましたが、資料についてですけれども、報告書全体の構成といたしましては、まず序論として、「はじめに」みたいな序論があって、懇談会設置の背景みたいなところを書いて、今お話しいただきました提言の部分があって、「おわりに」と、参考資料として開催の経過ですとかをまとめた冊子というようなイメージでございます。

今お話しいただきました提言部分については、都響の目指すべき方向性ということで、これまでの議論をちょっとまとめますと、経営についていただいたご意見、演奏活動についてのご意見、社会貢献活動についてのご意見、教育活動についてのご意見、それから広報活動についてのご意見ということで、大きくは五つぐらいにまとめられるのかなという

ふうに考えてございます。その中で、例えば今お話しいただきました経営については、都響のビジョンの策定について、こういう意見がございましたというようなところを踏まえ、たご提言をいただくというふうな形で考えてございます。

内容については、きょうのご意見もまた踏まえて、カテゴリーについては改めて整理させていただくような形になろうかと思いますが、現時点での、またこれについてのご意見というのをお聞かせいただければというふうに考えてございます。どうぞよろしくお願ひします。

それから、すみません、追加で、まとめにつきまして、11月に素案として一回お示しするというふうに考えてございますが、座長、副座長ともお話しさせていただく中で、ぜひ楽員の皆様のご意見も伺いたいという、今お話をいただいております。ちょっとどういった内容で楽員の皆様のご意見を聞くかというところはまた改めて整理させていただいた上で、座長、副座長を中心に、ちょっと意見をお聞きする場を設定したいと考えてございます。ほかの委員の皆様もご都合が合えば、そこにご参加いただくような形で考えてございますので、改めて日程調整の上で、意見を聞く場というところも設定させていただくように考えてございます。

11月に素案をまとめるという形で考えてございますので、意見を聞く場というのは8月、9月ぐらいにできればなというふうに考えてございますので、また改めてご案内させていただきます。

大変失礼しました。

【堤座長】 どうもありがとうございました。

ただいまの報告書の構成につきまして、ご意見、ご質問等をお願いしたいと存じますが、よろしくお願ひします。

【後藤委員】 この報告書というのはどうするものなのですか。

【小川GM】 形としましては、理事長が皆様のご意見を伺いたいということで設置してございますので、座長から理事長への提言みたいな形で扱わせていただきたいと思いますので、

【後藤委員】 配布するとか。一般のいろんなところに配布するものなのか、ただ単に1冊できるものなのか。

【小川GM】 これまで、この懇談会については一般にもホームページ等で公開させていただいておりますので、いただいたご意見というのは差し支えなければ公開というような形

でオープンにさせていただければと思っております。

【後藤委員】 でも、報告書というのは1冊つくるものなんですね。すみません。私はこういうのに不慣れなので、例えば国のいろんな機関に後で配布するものなのか、そういうものではなくて、1冊つくるものなのでしょうか。すみません。

【近藤理事長】 まだ部内で打ち合わせをちゃんとしている訳ではありませんが、例えば評議員とか理事など、都響に関係する方々にはもちろん1冊お配りしたいと思いますし、どなたにでもアクセスできるようにホームページで公開することも、個人的にはしたいと思っています。ただ皆さんも含めて、特にお世話になっている方々には、ダウンロードするのも面倒くさいでしょうから、プリントしたものをお届けするというのを考えております。

【後藤委員】 わかりました。ありがとうございます。

【近藤理事長】 あと別途、公表するのは適切ではないけれども、ぜひこのことは記録として残してほしいということがあれば、それは別途、何らかの形で事務局のほうで整理しておくという事はあり得るかもしれません。ただ基本的には全部公開ということですね。

私は、築地の移転後の再開発をどうするかについての懇談会座長をやったんですが、その議論の過程は100%出していましたね。これは都の基本方針なんだろうと思います。YouTubeでも流しました。

【後藤委員】 ご教示ありがとうございます

【堤座長】 そのほかに何かございませんか。

【中根委員】 報告書の構成はあくまでも案ということなので、今こんなことを申し上げるのは適切かどうかわからないんですけども、都響の目指すべき方向性の提言の部分で、何となくいきなり経営というのが出てくるのに、ちょっと違和感を覚えます。先ほど堤座長が非常にオーケストラの持つ意味とか、高尚なことを言われましたが、まず、最初にそういう話が出てくるべきではないかと思います。「はじめに」という項目があるので、そこに持ってきてもいいのかもしれませんが、都響としてはやっぱり一番最初に出てくるのは演奏の質を高めていくことで、どういう方向性に向かっていくか、そういうことが入っているといいのかなという気がいたします。

【吉本副座長】 ご指摘のとおりで、私も経営という言葉がどうかなと思っていて、経営と直接結びつくのは財政基盤の強化とか寄附金収入の拡大とか、その部分ですので、1番は例えば都響のこれからのビジョンぐらいにして、今言った財政基盤とか寄附金収入



の話はもっと後ろのほうの、例えば運営、経営みたいな、マネジメント系の話としてまとめたほうが、全体としての整理がいいかなというふうに私も思っております。

**【近藤理事長】** 一番最後までいいですね。こういうビジョンと課題があって、それをやる上では、やっぱり財政基盤だということ。その辺はお任せいたします。

きょうも含めて大変すばらしいご意見を頂戴して、この懇談会を設けてよかったなとつくづく感じております。いろいろやるべきこと、進むべき方向はあるんですが、今の点にも関連しますが、限られた資源、財政的、人的あるいは施設の、あるいは都の下にあるということでプラスもあれば、逆に制約もあるわけで、そういう中でどこに重点を置くかという、めり張りをつける方向をお願いしたいと思います。難しいと思いますが、あれもこれもクリスマスツリーになってしまうと、社会的なインパクトも、私どもの楽員に与えるインパクトも余り強くないおそれがあるので、何か、ある程度、的を絞っていただけるとありがたいです。

例えば、やるべきことで、まず海外公演も含めて、高いレベル、世界一を目指すというものから、アカデミーのように、これから育つ若手を育てていくマスタークラスとか、あるいは小中高生あたりを味方にする、いや学齢期前、10歳未満が一番大事だとか。全部が大事だと思うんですが、全部はできません。

それから都のオケということで、やはり多摩地区も島しょ地域も、ああいった事例は都響でしかできないです。しかし、世界にも行きたい。都だけじゃなくて、北海道から沖縄まで、年に2回か3回は行きたい。それによって日本の奥深さを学びたいいろんなお客さんがいることを知りたい。これも全部はできないわけですね。

ですから、全部やりたいんですけども、資源は無限ではない。客観的に、外からごらんになって、今の都響にできること、やってほしいこと、都響ならではの、なのは一体どれなのか、そのうちの1番と2番ぐらい、何か方向性がわかるような、アクセントがわかるような書き振りにしていただけるとありがたいかなと思います。ほとんど不可能に近い注文だとよくわかっておりますし、私どももそういう注文を受けたら、そのとおりにできる保証はないんですが、あれもこれもだと、結局、薄く広がってインパクトがなくなるといことは今のご時世で明らかなので、思い切ったアクセントというのをちょっとお考えいただけるとありがたいなと思っています。

**【堤座長】** それはやはりプライオリティーということでしょうか。

**【近藤理事長】** ある意味でプライオリティーですね。

例えば先ほど五つぐらい、幼児から、中高生から、若手音楽家のためのアカデミー的なものから、海外へ行く、楽員が徹底的に練習して世の中へ出ていくなどいろいろな段階があり得るでしょうから、その四つか五つの段階のうち、全部が大事ですというだけで、結局、我々も動きようがありません。何か皆さんからごらんになって、都響が一番ここに比較優位があるんじゃないかということをお示しいただけるとありがたいということです。プライオリティーと言えばプライオリティーですが、余り順番を1、2、3、4、5とつけるのも、必ずしも適切ではないかもしれませんので、何かその辺についてご示唆いただけると大変ありがたい。

【吉本副座長】 本当にプライオリティーをつけるのは難しいと思うんですけど、例えば先ほど事務局からご説明がありましたけど、11月に素案をお示しするときに議論の全体を整理する形にさせていただいて、その場で懇談会として、幾つ項目が出るかわかりませんが、何を重視すべきかということをご議論いただいて、それをまとめたものを前に特出しして、例えば都響への五つの提言とかというふうにして、懇談会として重視すべきと思われるポイントはこういう感じですよというふうにまとめるという方法もあるかなと思います。事務局と相談しながら、理事長のご意見はよく理解したつもりですので、ぜひ、いいものをつくっていききたいと思います。

こういう資料を作成するときにもいつも迷うというか、余り絵に描いた餅の提案をしても意味がないんですけど、かといって現実を包含し過ぎると、割と長期的なビジョンも含めて提案しなきゃいけない、そこが結構難しいところではあるんですが、その辺は次回、素案が出た時点でご議論いただけたらなというふうに思います。

【堤座長】 いろいろご意見いただきました。それではご発言の趣旨を踏まえまして、構成案を整理して、内容につきましては座長、副座長、理事長にご一任いただいてよろしいでしょうか。

(異議なし)

【堤座長】 ありがとうございます。それではそのように、よろしく願いいたします。

では、第6回の懇談会について、事務局より確認をお願いいたします。

【小川GM】 今ご議論いただきましたことを踏まえまして、次回の11月の懇談会につきましては、報告書の素案というものをご提示させていただくということで進めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【堤座長】 ありがとうございます。

それでは近藤理事長、きょうの議論をお聞きいただきまして、何か一言いただけますでしょうか。

**【近藤理事長】** ありがとうございます。今既に申し上げてしまったことに、ある意味では尽きるんですけれども、本当にどういう特徴を持った、どういうブランドを持ったオーケストラにしていくか、これは就任して以来、ずっと悩み続けてというか、考えながら結論が出ていないテーマです。限られた知識と経験ですので、そういう意味で、都響ならではの特徴を発揮するところは、皆さんからごらんになって、どこなんだということを教えて頂きたい。ほかにも、東京だけでも10に余るオケがあるわけですから、みんな同じことを同じように薄く広くやっていたのでは意味がない。といて、お互いに調整して、俺はこれをやるから、おまえはこれをやれということもなかなかできない。そういう中で、客観的に見ていただいて、やっぱり都響の強みはここにあるのではないかというところが何かにじみ出てくるような、かつ、マクロ的というか、中長期的な世界の流れ、日本社会の流れの中で、そもそもクラシック音楽なりオーケストラはどのような位置づけであるのか、その中で流れに対応して積極的にクラシックの魅力を伝え、世界に広げていく上で、そういう観点から見て都響はどこに重点を置いてもらうのが一番世界の役に立つのか、というような観点でご提言いただけると大変ありがたいと思います。

これもまた、実際に難しい作業になるかもしれませんが、短期的にすぐできること、これはしっかりやっていきなさい、しかし中長期的には、こういうことにもしっかりと意識を持ってやってくださいというようなことで、一種のプライオリティー的なものが短期、中長期ということを出るのかもしれませんが、その辺はもう、副座長の筆一本でということになるかもしれませんが。プレッシャーをかけてしまうかもしれませんが。

そういう意味で、ほかのオケにこういう有識者のご意見を聞く機会や組織があるかどうか分かりませんが、やはりオーケストラ全体の中で、クラシック界全体の中で、いい提言が出たなど、都響について、都響のことがよくわかっておられる方々から、いい提言が出ているなどということでも話題になるようなものに、ぜひしてきていただきたい。そうすれば、我々自身も制約の中でベストを尽くせる、あるいは制約を少しづつ切り崩していけるようなエネルギーもわいてくるのではないかというふうに思いますので、ぜひそういった観点から、マクロの流れの中での位置づけということでご提言をお願いできればと思います。

**【堤座長】** どうもありがとうございました。

本日は委員の皆様方からはさまざまなご意見をいただき、まことにありがとうございます。

大変貴重なご議論をいただきましたが、残念ながら本日は閉会の時刻となってしまいました。事務局からその他ということで何かございましたら、お願いいたします。

**【小野事務局長】** この次、次回は11月になりますが、第6回の懇談会につきましては、日程でございますが11月25日の月曜日、午後2時から、次回は東京文化会館の中会議室をご用意いたします。開催のご案内は改めてさせていただきますけれども、またどうぞよろしくお願いいたします。

以上でございます。

**【堤座長】** それでは、第5回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を終了したいと存じます。長時間にわたり、ご協力をいただきましてありがとうございました。